「トマトをたべるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もとになる原作もない。
あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、**その身体の記憶から生まれる**想像力である。

この作品は、**観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物**ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。
意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。
その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。
作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。
連綿と続く有形無形な動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。
上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？　そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトをたべるのをやめたとき」―S.I.Witkiewicz のテキストから偶然見つけられた―は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。
想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？　いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？
偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するとことを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。